HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 幼児の歌唱能力を規定する要因の解明 ： 家庭における音楽環境と認知能力との関連性に着目して［論文内容及び審査の要旨］ |
| Author(s) | 小椋, 佐奈衣 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第13370号 |
| Issue Date | 2018-12-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/72456 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Sanae_Ogura_review.pdf, 審査の要旨 |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　小椋 佐奈衣

主査　教　授　安達 真由美
審査委員　副査　教　授　川端 康弘
副査　准教授　瀧本 彩加

学位論文題名
幼児の歌唱能力を規定する要因の解明：
家庭における音楽環境と認知能力との関連性に着目して

当該研究領域における，本論文の研究成果は以下の通りである。第一に，これまで「音高や音程の復唱」など，限られた課題でしか測定されてこなかった歌唱能力を，より多くの課題を通して測定するために国際共同研究として開発された“AIRS Test Battery of Singing Skills for Children-Revised”（以下 “ATBSS 子ども用改訂版”）の評価尺度を提案し，その信頼性と妥当性を実証したことである。このことは，90 人の幼児を対象に行った調査データに基づく結果であり，各尺度の高い寄与率（.934—1.000）や，「三和音の復唱能力」，「周知の歌の復唱・再生能力」，「続くフレーズの復唱・生成能力」，「終止感のあるフレーズの復唱能力」という，本論文で抽出された 4 因子の高い信頼性（.949—.965）や累積寄与率（76.7 %）が，他の年齢のサンプルでも再現可能であるか，今後検討していく必要がある。しかしながら，これまで存在しなかった歌唱発達検査としての機能を「ATBSS 子ども用改訂版」が果たし得る可能性があることを示しただけでも，音楽発達研究における学術的貢献は大きいと言える。第二に，英語で開発された「ATBSS 子ども用改訂版」を日本語で実施する際の詳細なマニュアルや，言葉による教示だけでは分かりにくいと思われる課題のための説明用の絵などを付録として提供したことである。日本には，幼児の歌唱発達を専門とする研究者が多いため，これらの資料は今後の追試に大いに役立つはずである。第三に，日本で開発された「新版 K 式発達検査 2001」の「認知・適応」領域から抜粋した課題においても，海外で使用されている知能検査の課題を用いた先行研究と同様，音楽経験が時空間認知課題の成績を高めることを再現したことである。これにより，音楽と時空間認知課題の成績との間の関連性はよ

り頑健になったと言える。一方，時空間認知課題の成績を，正確性を示す「得点」だけではなく，「どれだけ速く正確に課題が遂行できたか」を示す「処理能力」（＝得点／遂行時間）でも検討したことは，申請者の独自性を表している。

以上述べてきたように，本論文の成果は当該研究領域において重要な貢献をなすものであると考えられる。このことは，本論文の第３章および第４章の内容の一部が，二本の査読付き論文として採択されていることにも現れている。また，第４章で議論されている「音楽的早期教育が知的障がいを伴わない高機能広汎性発達症の幼児の発達支援にも有用となり得る可能性」は，学校心理士の資格を持ち，長年，小学校での特別支援教育に関わってきた申請者ならではの発想から生まれたものであり，応用分野への将来的な貢献を期待させるものである。一方，審査では先行研究のレヴューが十分とは言えないのではないかという点や，個別の結果に対する説明が不足している点などが指摘された。しかし，口頭試問において，申請者が本論文で設定した目的を達成するために，あえてレビューを限定したり，個別の結果よりも全体像に焦点を当てたりした旨の説明があり，審査委員会としても納得することができた。

以上の審査結果に基づき，本審査委員会は全員一致で，小椋佐奈衣氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。